討を加えたが，10 ng/ml の濃度までは交叉反応はみとめられなかった．同一キット内，各キット間でのバラツキを検討したが，変動係数は，平均1.37, 3.63% と低値であり，良好な再現性を示すことが確認された．したがって本キットは臨床的に十分応用可能であることが明らかとなった．また正常者例の空腹時セクレチン値を測定したところ 54 pg/ml から 217 pg/ml の範囲に分布していたが，ほとんどの例は 70～110 pg/ml の範囲にあった．今後セクレチンの分泌調節についての検討，疾患における分泌動態の検索が必要である．

41. 横隔膜周辺疾患の核医学検査，—とくに胸部写真の横隔膜異常と肝シンチグラフィーについて

土田　龍也　　中島　和之
（城北市民病院・RI 室）
越智　宏暢　　増田　安民
浜田　国雄　　南川　義章
（大阪市大・放）

胸部単純 X 線写真上横隔膜に接して見られる異常陰影の診断および鑑別診断に肝シンチ，肺血流シンチ，^{67}Ga シンチなどを併用した複合核医学検査が有用であった6症例を報告した．6例のうち，partial eventration 2 例，横隔膜腫瘍 1 例，右横隔膜下膿瘍 2 例，左横隔膜下膿瘍 1 例であった．

partial eventration は，肝シンチのみで診断し得たが，他の4例については特に複合検査が診断上有用であった．

右横隔膜腫瘍の症例では，胸部 X 線写真上最初 partial eventration が疑われ肝シンチを行なった．しかし右葉上部に欠損像がみられたため，肺血流シンチと併せてスキャンを行ない，とくに右側面像で横隔膜を中心に円形の欠損像として描出され横隔膜腫瘍と診断し得た．

右横隔膜下膿瘍の2症例では，肝シンチ，肺血流シンチの多方面からの像からの診断可能であったが，左横隔膜下膿瘍の1症例では肝シンチと ^{67}Ga シンチが診断上有用であった．

最近，種々の放射性医薬品が容易に使用できるようになり，それらの特徴を生かし複合検査を行なえば，多くの症例で非観血的に質的診断ができるものと考えられる．

42. Tc- フィテートと Au コロイドによる肝血流指数の比較

藤田　信男　　道場恵美子
吉井　　修
（京都第一赤十字病院・RI 室）

前回われわれは肝シンチに Tc 製剤が常用される今日，Au 時代にシンチと同時測定された肝血流指数の意義を検討し，本検査がそれ自体肝疾患の経過把握の指標となる他，肝シンチ特に脾影の意義判定にも有益で肝シンチと同時測定の価値を再確認し報告した．今回は体内分布が Au に近いといわれる Tc フィテートが肝血流指数測定に Au 同様に応用可能かを検討する目的で日常検査の過程で Au と同時投与し比較した．対象は昭和51年7月から6か月間200例．Tc- フィテートはダイナボット社の Cow とキットによる自家調整，Au は第一 RI 製．

Tc フィテート 3 mCi と Au 50 μCi を混合静注し末梢血中消失曲線から指数 K_1 肝集積曲線から指数 K_2 を求める．4CH の指向性デテクターを用い，Tc. Au それぞれの K_1, K_2 を求め症例ごとの他の諸検査所見を加味して研討した場合，Tc フィテートが Au コロイドと良く一致する例も多く見られたが，相関性が悪い場合も実証され，これは Tc-phytate 調整時のバラつきによるものであろうと考える．すなわち現段階においては Tc-phytate は Au に代わって血流指数測定に用いるには難点がある．現在われわれは Tc- フィテート 1 mCi に Au コロイド 30 μCi を混じ肝シンチ検査時に Au コロイド肝血流指数を同時測定を行なっている．

Presented by Medical*Online